

# 多元化・ネットワーク化の世界に求められる知の枠組み

オーガナイザー 田村高幸 (Takayuki TAMURA)

千葉大学大学院社会科学研究院

提題者 目時修 (Osamu METOKI) 城西国際大学経営情報学部

「学ぶことのユニバーサルデザインについて」

山田瑞紀 (Mizuki YAMADA) 千葉大学大学院人文公共学府

「自己エスノグラフィという記述方法」

榎野沙央理 (Saori MAKINO) 千葉大学大学院人文社会科学研究所

「客観的ということを考えるために」

田村高幸 (Takayuki TAMURA) 千葉大学大学院社会科学研究院

「知のユニバーサルデザインを支える論理体系」

知の妥当性をその客観性や概念性に重きをおくような知に対する一元的態度が、現在の多元化やネットワーク化が進んだ世界で生じる困難（支配・差別・衝突等）やこのような問題に対応できる人材養成という要請を解決していくことを難しくしているように見える。その解決のためには、この多元的かつネットワーク化された世界及び世界の中の各人を、ひいては、この知自体を、生き生きとさせ・協奏的に発展させていくという世界にやさしい知の枠組み（知の妥当性の基準をふくむ）や知への態度が求められる。

そこで、今回のワークショップではこの問いに「ユニバーサルデザインの観点」から応えていくかを教育学から目時修氏、社会学／人類学から山田瑞紀氏、哲学から榎野沙央理氏、論理学／数学から田村高幸による提題及び総合討論を行うことで、その回答の一つを示したい。以下、提題者のテーマに従って、ワークショップの流れを概観する。

最初の提題者の目時修氏は特別支援教育の経験を持ち、そこから得られた多様な学生及び教師の「困り感」及び「困り感」への対応としての「協同教育」に着目した学びの枠組みである「学ぶことのユニバーサルデザイン」の研究を行ってきている。この「学ぶことのユニバーサルデザイン」の観点は、授業での学生各自及び教師の理解の多元性に着目し、その多元性を生かしながら多方向協同教育をするための方法を示唆し、当該授業の内容を学生各自及び教師に「活用できる知」を獲得していくことを可能にする。

次の提題者の山田瑞紀氏はDV被害者の当事者性の研究を当事者のリアリティを表現することを可能にする「自己エスノグラフィ」により進めており、併せて「自己エスノグラフィ」自体の研究も行っている。「自己エスノグラフィ」は、多元的な世界の各自が世界に生き、世界を構成していつている当事者としてのリアリティを表現し、そのリアリティが自己認識、他者認識を生み出す源泉ともなり、多元的世界の問題解決において必要不可欠な方法である（たとえば、多元的な教育である目時氏の多方向協同教育を支えるものとなっている、等）。

3番目の提題者の榎野沙央理氏はウィトゲンシュタイン研究において哲学的治療の観点を止揚することにより新たな哲学的方法論としての「自己明晰化」の重要性について研究を進めている。今回の提題は、「自己明晰化」の観点から、ウィトゲンシュタイン

の「確実性」を用いて、「客観的ということを考えるために」というテーマで、「客観的」の分析を行っている。多元的な世界での知の枠組みを構成する上でも、「客観性」という枠組みが持つ利点と問題性を考察することは、とても重要である。

最後の提題者である田村高幸の提題では、「知のユニバーサルデザイン」を進めていくために必要な論理体系、論理体系の基本的枠組みとは何であろうということに答える。すなわち、論理体系にとっていかなる基準で基本的であるかを明晰したうえで基本的枠組みもしくはそれをもたらす方法を生み出し、そこに何を加えていったら（その動機を明晰にしたうえで）既存の論理システム、ひいては、各自のリアリティに適合した論理学を構成することができるか、また、この基本的枠組みがそれらのシステムを更新させることをいかに可能にしているかを示す、ということである。

総合討論では、「学ぶことのユニバーサルデザイン」でもたらされる各自の「承認」をもたらす多元的協同教育の重要性及び多元的協同教育を支えることで特徴づけられる知の枠組み、「自己エスノグラフィという記述方法」によってもたらされる各自のリアリティ及びその動機の表現及び表現方法、「客観的ということを考えるために」もたらされる「客観的」の「使用」（その動機も含めて）及び「客観的」ということの利点・欠点、「知のユニバーサルデザインを支える論理体系」によってもたらされるユニバーサルという意味での「基本的」な論理体系及びそこから拡張可能性・拡張方法、という知見を有機的結び合わせることによって、「多元化・ネットワーク化の世界に求められる知の枠組み」の構成に如何に貢献できるかを取り扱う。